

「納西人と楊氏一族」について

村 井 信 幸

周知の如く、西南中國には數多くの少數民族が居住しそれぞれ連綿とした歴史を保持し續けてきた。元、明兩王朝は彼らを所謂土司制度という間接統治方式によって支配した。清朝はこの制度を一應踏襲したが、大きな改革を行い、これによって西南中國少數民族の社會には大きな變化が起こる。この政策は「改土歸流」と稱されるものであった。

ここで土司制度と改土歸流について概略的に紹介すると、土司制度は元代に確立し、明代に發展した。つまり中國王朝は西南中國少數民族の土酋に官爵を與え、その地を統治させた。このような土酋はその地で絶對的な權力を持った。彼らは土司、土官と呼ばれ、後に土司と總稱された。これらの土司はその統治領域で專横的な政治を行うものが多かった。清朝は明代の政治を踏襲したが、ある地域においては、土司を廢止して王朝の官僚にその地を統治させた。このような官僚を「流官」と稱し、これによって清朝の中央主權が強まった。この政策を改土歸流というのである。⁽¹⁾（なお改土歸流は明代から行われたが清朝はこれを徹底的なものとして行った）

中國、日本では土司制度、改土歸流に関する研究は多いが、流官自體に関する研究はあまり行われていなかった。本稿では西南中國少數民族のうち納西（ナシ）族の事例に問題点をしぼり、納西族の土司木氏が廢止されて、流官となった楊氏について、著名な納西族の女流作家趙銀棠氏の著作を紹介して考察したい。⁽²⁾

先ず、納西族について簡単に紹介すると、この民族はチベット・ビルマ語族に属する西南中國少数民族の一つである。彼らは漢籍史料には「麼些」「磨些」等の名稱で現れ、現在でも中國、歐米の研究の間では、「麼些」「Mo-so」の名稱が用いられることが少なくない。その居住地は中國雲南省麗江納西族自治縣を中心として、中甸縣、維西傈僳族自治縣、寧蒗彝族自治縣、及び四川省境域一帯であり、人口總數は約三十萬人である。その生業形態はかつては農耕と牧畜双方を營んでいたが、現在は農耕中心である。その宗教はチベット佛教、佛教、道教等も信仰しているが、數多くの納西族が彼らの古來の宗教である東巴教を信仰しており、巫師東巴は儀禮を行う際に彼ら固有の納西文字（象形文字、音標文字）で記された東巴經典を詠誦する。（附圖參照）新中國成立後は、納西族出身の研究者によりこれらの貴重な資料が収集整理され、緻密な検討をもとに刊行されている。³⁾

納西族出身の趙銀棠氏は「納西人與楊氏家族」という著作を發表し、この論文は氏の著書『玉龍舊話新編』（雲南人民出版社、一一一—一二六頁、一九八四年）に掲載されている。簡潔な内容であるので、ほぼ全文をここで紹介したい。「長い間納西族に「忠義家族」と稱されているのは楊氏一族である。彼らは明代の納西族土司木氏の全盛時代から清代末期まで、絶えず納西族文化を發展させる役割を果たした。その先祖は湖南の人で木氏に醫師として招聘されたといわれ、木土司の文書の仕事にも携わっていた。木氏がその統治領域のすべての土民の姓を「和」氏とした時、楊氏も和姓に改名した。大旅行家徐霞客が麗江滯在中の記述で述べているが、木氏は和勳という人物を派遣して彼を出迎えている。傳え聞くところによると、和勳は楊家の一族だったという。

清朝の改土歸流後、楊氏は本姓を回復し、家譜を編集する。《楊氏家譜》には、當時の名士の序言があり、最初に《麗江府志略》の學正（官名）である萬咸燕の毛筆の文章がある。木樞が記した《楊氏十世起緣起》中には次のように記されている。「楊氏始祖、諱「輝」、楚人也。由湘至滇、由滇至麗、七傳、皆以醫道爲專務。楊公「各」爲掌印龍池長

官、〈與本府〉同赴兩京。欽奉詔本府三品忠義、共襄厥成。……楊公「祥」、壯年奉主出差兩京、歷經數回。……又曾
資奏神宗御前、請《大藏經》二部、功垂不朽。……。求文于元宰董宗伯〈董其昌〉、承詢巔末、楊公應對如流、深通義
理、董公嘉悅。……公子諱「成」、自幼攻習詩書、兼行醫業、救濟一群生靈、指到春生。……」（以上から彼らの学問・
医療への熱意を理解出来る。）

清朝時代、この楊氏の一族中で前後して「孝廉方正」として推舉される人が數人いる。科擧、卓行、文學等の方面で
それぞれ大きな影響を及ぼした人物は下記の如くである。

楊本程（一七九九—一八四四頃）「字道南、號毅山、由府學拔爲刑部七品官、中式甲午科順天（北京）府舉人、官刑
部主事。其妻和氏〈これは納西族の女性在北京に行った最初の事例である〉その子楊昞（一八二六—一八六八頃）は《
麗郡詩征》の紹介するところによれば「楊昞、字子光、爲毅山比部之子、少在京都從戴均帆講授、英年嗜學、取方乎上、
工詩文。」とある。咸豐六年、麗郡の六屬公は各族を討つ。特に回族の張正泰は檄文をし、すぐに子光に提出した。一
時恨み誹りが傳わり、郡が陥落して後、子光はあてもなく彷徨して死んだ。士林（讀書人の仲間）はこれを哀悼して
《留春齋詩鈔》を著した。

楊元之（一八五〇—一八九二頃）、字用九、楊昞の子。彼は多才多藝な納西族詩人であった。彼は納西族の民歌、歌
謠に共感を持ち、常に納西語を用いて詩を書いていった。一般に納西族の歌手は字を知らないが、これを愛して吟唱す
る。……納西族の俗語ではこう言う「樵と牧童では道が違う」。楊元之はこれに基づいて、一遍の五言の長古詩を残し
ており、青少年は互いに競争することはないと戒めている。虚しく歲月は過ぎるが顯著な効果がある。詩中の一部を紹
介してみると、下記の如くである。

「山陽には草が青々として、山陰には樹が蒼々としている。山中には草木が多く、樵も牧者も喜んで行く。……牧童

は短い毛氈をまとい、所々に雲霧が見える。樵の心は羨望する。キバノロを捕らえ、兎を追う。遊び戯れて我を忘れる。西山にすでに日が暮れた。牧者は牛、羊を追って歸る。夜には風がたなびいて吹き、樵は黙って二つの別れ道を徘徊する。四回振り返って困惑してしまふ。ひもじくなり腹がへって鳴る！」

楊氏では前後してあるいは同時に毛筆の書法で著名な人物が少なくない。それを一、二略舉してみよう。

楊光遠（一八二〇—一八七四頃）、字少堂、咸豐乙卯（一八四五）科舉人。彼は科舉の試験のために長期北京に滞在した。また雲南で戦争が勃發し歸ろうとしても出来なかった。常に「佐學政」（學政を補佐）をスローガンとし、字（書）を賣って生計とした。《拓雪樓臨古今名帖二十四冊》で「超脱高妙」の贊辞を獲得している。後に宣威縣學正となり、その榮譽は雲南で有名である。往々にして、その書の一紙は「墨寶」として伝えられている。

楊光遠の子楊卿之（一八七二—一九一七）、字髯侯、幼年にして秀才でまた貢生となる。その性格は簡朴で、字はその人格のようだ。かれの書法はあまり手本に注意をはらわずに、かえって古代の造字及びその發展過程を眞劍に研究した。その心は神と出會い、その造詣は驚くべきほど高い。その懸腕（一種の書法）は、書くと人を驚かす。劍川の大書家趙藩が彼を「自謙弗如」とした。楊卿之の性格には關しては他にも故事がある。ある進士が麗江知府に任ぜられた。彼は邊境の文化が遅れているとみなし、試してみようとした。即ち「咏雪山」（雪山をうたう）の題目を地方の紳士一同に唱和（詩歌のやりとりをすること）させた。楊卿之の作品はもととなかったが、府官の意圖を傳え聽いて、ちょっとした氣持ちで詩を一首即興で作った。

咏雪山

萬里崑崙末 南來此獨尊

劃天分半壁 笑嶽大中原

冰雪無今古 陰陽失曉昏

會當臨絕頂 縱目放高吟

府官はこの詩を見て、非常に驚いて彼とその後、文章のやりとりをすることを願ったという。しかし、封建社會では邊境の文化人に生きる方法が少なく、その生活は苦しいものであり、その才能は往々にして進歩しない。前記したような人々は凋落して困窮した生活を餘儀なくされて、五十歳まで生きた者は極めて少なかった。

楊氏と納西族社會の密接な關係は、その他に醫療、教學の兩面に見られる。楊氏の先祖は代々醫師であったが、後には醫療専門ではなくなった。彼らの療法は針をうつ療法であり、先祖代々繼承されて來た。彼らには醫者を生み出す義務があった。舊納西族社會においては、病人が出ると輕症の場合は藥草ですます、重症の時は鬼を送り、神を祭る。それでも効果が無い場合のみ醫師が治療する。楊氏の先祖代々の針をうつ救急治療法は、激しい下痢（コレラ）、轉んだ時の負傷に効果があった。當時の納西族社會では衛生に關する常識は全くなく、その飲食は往々にして不衛生であり、急性の胃腸の激痛が最も感染しやすかった。この種の病氣に對しては、麗江において楊氏の打針放血治療が最も効果があるものとされた。都市、農村にかかわらず、いかなる時でも、おそらく深夜でもその門をたたいて救いを求める者があれば、すぐに「按照祖訓（祖先の教えに照らし）」に應じて治療を行い、決して引き延ばしたりせず、治療費も取らなかった。診察時には一本の特製の銀針を、患者の脛、あるいはその他の部分にうち、病血を流すと激痛はすぐに治まった。ある時は簡単な處方を病人に施すと病氣は快癒した。このようなことから、當地の人々の彼らに對する信任は厚かった。

楊氏には讀書人が多く、當時は先生も多かったが學生も多かった。これに關しては、次のような故事がある。當時、科擧を受験する際の門戸の制限は非常に厳しかった。例えば屠殺業、太鼓打ち、衙門の差役等には一律に科擧の受験資

格はなかった。しかし、當時楊家に來て書を學んだ學童がいた。彼は聰明で學問を好み、教師も非常に目をかけていたが、惜しいことにこの子は屠殺者の家の出身で科擧の受験は不可能であった。教師は熟慮の結果、この子を養子にして、楊育と命名して育てた。そして絶えず慈しんで育てた。後に楊育は秀才として生員となったところか、光緒元年（一八七五）擧人となった。このことは當時の納西族社會では美談として傳えられている。

清朝末期、楊氏の楊穆之（一八七一—一九三二）は、都へ行き、朝考（進士に合格した者を天子自らが課題を設けて試験を行うこと）で、第一位で優貢となった。彼は才能が有るだけでなく、書法にも優れており、翰苑人才と稱せられた。光緒三十四年彼は麗江縣學堂總董（第二任）になった。辛亥革命後、彼は雲南省都督府編修に任ぜられ、諮議局議員、德欽、永仁等の縣長となった。故郷に歸ってからは、ずっと教育に従事して、塾を設けて弟子を教育し、詩の作品も少なくない。納西族の名人の先輩はその詩を高く評價している。詩集も數種あり、その一族の業績を系統的に整理しており、同じ邑の王竹淇は彼を高く評價している。しかし彼の晩年は恵まれたものではなかった。子女に先立たれ、一族は凋落し、その作品はすでに散失して、悲しみのあまり死去した。なお醫療方面で今も活躍している人がいる。それは楊光大である。

我家と楊家は長く密接な關係にあった。私の曾祖母の二代前と二代後。つまり、曾祖母から私の代まで趙家の女性は楊家に嫁いでいる。私は母の口からつまらない物事を相當多く聞いた。そして毎年春秋の祭祀では、楊府堂上で習わしとして一枚の色彩の入った家庭故事の圖が掛けられて、子供たちはこの繪を見るのが最も好きだった。この繪には多くの説明がある。私は當時まだ理解出來なかったが、相互に述べてみると、ある大人たちの解説から、繪に描かれていることが明確になった。皆祖先の良い言葉、美しい行いを意味しているのであった。例えば、誰々は醫者として人を助けた。誰々は山寺にこもって修行した。誰々は獲物を逃がしてやった誰々は深夜も勉強した。誰々は都へ行って拜謁し

た。誰々は使節として行って身を投じた等。ある時は我々は聞いて喜んで笑い、ある時は涙を流した。

私が十歳頃の記憶では、家は四代が同居していた。最長老は曾祖母で念佛を唱え、心は最も慈愛に満ち溢れていた。彼女は毎朝、朝食を取る時、餘った食料を屋根に投げて雀に食べさせた。そのことは人々から見れば奇妙なことに思われた。祖母と母は彼女の意志を理解して笑わずに食料をまくのを手傳った。私は後になってやっと知った。「春月、飼飢鳥于庭」これは母方の祖父が昔からよく語っていたことである。

歲月は留まらず、世は常に移り変わる、我々の子供の頃の楽しかったことも消え、はっきりしなくなっている。

私はかつて楊氏―外祖家に「書香（學問をなす氣風のあるもの）廿代」の説が伝えられている事に關して懷疑的であった。なぜなら各種の記載から、改土歸流以前、麗江では木氏をのぞいては書を知り、禮を習う子弟はおらず、一般民衆は讀書が出来ず、それゆえ外來人がこの地に寄留して、數代以後改名して土着の人と同化することは不可能であった。楊氏は明代中葉に麗江に行き醫療を行っている。その後木氏から醫官として招聘されている。その間に數代で和姓に改めている。どうして詩書の舊業のみが残ったのか？この一點に關しては、現在すでに論據を得ている。楊氏の宗譜の前に、何人かの清初の名人が序文を記している。萬成燕は楊氏の系譜で（その教育業績について）次のように述べている。「餘來鋒麗、童子之能爲文者、相隨請業。材可教而弊于俗、殊憤憤也。楊子恩、年差長、志篤學、朝夕勵之。戊辰夏、學使鞏案臨、楊子補弟子員……」これ以後、代々館（施設）を開いて學問を授けて、地方の人材を育てた。歴代郷土の媒酌人となり、「孝廉方正」等の恩典を受けた。このようなことは、ある人が言った、「楊氏は麗江文化と密接な關係がある」ことを確證するものであると。（以上で趙氏の著作に基いて考察を行った。）

以上の如く、趙銀棠氏の麗江納西族地域の流官楊氏に關する論文を紹介した。趙氏の家は流官楊家と四代にわたる密接な關係にあったことから、流官を知るために貴重な資料と思われたので、本稿で紹介した。次に流官についてさらに詳述すると、前記した如く、納西族の土司木氏は元代から清初に至るまで約三百年間納西族を支配し、その全盛期には「木天王」と稱されるほどの権力を持った。ゆえに納西族の民衆に對しては嚴しい搾取を行った。清初に木氏の権力が衰亡すると、その遠戚にあたる阿(木)知立が中心となって、木氏に對する告發を行い、麗江の地に改土歸流が行われ、木氏は権力を失った。⁴⁾木氏に代わって麗江を支配したのは、流官楊秘であり、この人が所謂楊氏の祖である。彼は清廉潔白な知識人であり、その改革は麗江納西族の社會において成功をおさめたといえる。なぜなら、納西族の改土歸流は雍正帝年間において最も初期に行われ、順調に行われた例とみなされるからである。⁵⁾

改土歸流は明代から行われていたが、清朝はさらにこれを強行し、最も活發に行われたのは雍正帝の時代であった。

この政策によって西南中國少数民族の漢化が急速に行われ、儒學が彼らの間に普及し、少数民族出身の科擧合格者が多數現れる。しかし、この政策は西南中國少数民族の社會において施行されるには數多くの障害があったことを述べねばならない。特に苗族、彝族等の少数民族は改土歸流に對して激しい反亂を起し、改土歸流の最も強硬な推進者であった鄂爾泰は彼らを徹底的に討伐した。⁶⁾また菊地秀明氏によれば、流官の側にも問題があった。例えば廣西の泗城府では「從來の土俗や苛政を悉く改めよう」とのスローガンの下で漢人官僚による直接統治が開始された。だが西林縣では康熙四年(一六六五)の改土歸流から五十三年間で、赴任した十六名の知縣のうち九名が「病氣」即ちマラリアなどの風

土病にかかって死亡するなど、流官統治は順調に進まなかった。この対策として清朝は風土になれた廣西東部の官員を、「三年卽陞」即ち三年間の任期滿了後に必ず昇進させるという保證付きで派遣した。だがこの「調補」官員も任期二年間で任地滞在期間が三か月に満たなかった西隆州知州吳琦のように瘴氣が發する季節を外地で過ごす者が多く、「一切の地方事務は家人や胥吏に任せ」「自分は入境せず、指折り數えて時が經つのを待った」という。しかも調補官員の中には「三年卽陞」の魅力に引かれて賄賂で職を得た生員や吏員が少なくなかった。彼らは漢人官吏との接觸を嫌う少數民族の心性に乗じて、「科斂徵收（税のとりたて）は前に比べても特に甚だしい」と土官時代を凌ぐ過酷な收奪を行った。^①

以上の菊地氏の報告によれば、如何に清朝が行った改土歸流が如何に困難であったかということが容易に理解出来る。前記した如く、麗江における納西族の改土歸流はこのような事例と比較すると、支配者の側もまた非支配者の側からみても順調に行われたと思われる。楊氏の初代流官である楊秘は麗江の地において改革を行った。まず木氏の領地を沒收し、納西族民衆に對する賦役、徵税に關する改革を行った。そして農耕、養蠶においても改革を行った。しかし特筆すべきことは、楊秘が當地の知識階級である萬咸燕と共に學問を獎勵したことである。改土歸流以後、清朝は學校を廣く設立した。納西族の社會では、土司木氏の支配當時は、木氏は大變な教養を持っていたが、民衆が知恵をつけては統治しにくくなると考えて、聰明な子弟をすべて奴隸のように扱い、詩書を學ぶことを許さなかった。康熙四十年（一七〇一）、麗江府流官通判は學校を設立することを申請した。しかし、木氏の様々な妨害にあって何度も挫折した。改土歸流の後、府學は場所を代えて建設された。そして義學も設立された。麗江の地の禮教は漸く起こつたのである。そして入學して讀書する者が増加していった。後に麗江の何人かの文人の詩作は造詣の深いものとなった。さらに文化發展も顯著になった。その結果、麗江から科擧の合格者が多數出たことが報告されている。このようにして楊氏の支配によつ

て雍正元年（一七二三）以降、麗江では納西族の社會においては漢化とくに儒學の普及が大幅に行われ、大きな社會變化が起こる^⑧。從來中國の研究者の間では、改土歸流に對しては肯定的な見方が多かったが、納西族出身の研究者楊福泉氏はこれと全く反對の見解を示している。つまり、清朝の急速な儒教思想に基づく漢化政策は納西族の社會の古くからの傳統を崩壊させてしまったと氏は主張するのである。特に氏は①納西族社會における青年男女の情死の増加。②葬儀の急速な變化。③男尊女卑に注目している^⑨。

また溝口雄三氏は、儒教を五つの側面に分けている。①禮制、②思想、③倫理、④學制、⑤習俗である。氏はさらに主張する。「すなわち儒理學はたとえば朱子、王陽明、李卓吾、呂坤、載震……といった各時代のアスペクト、各時代の理を持った理學の流れ、その理觀の展開を總稱したものとなる。とすればこの儒理學の展開の先に康有爲、譚嗣同、孫文らの理觀があると理解でき、彼らはそれに依據して最終的には反專制、反封建のイデオロギーを獲得した、つまり封建的禮教を打倒するイデオロギーの主體を確立した、とみることができる。

では打倒されるべきとされた禮教とは何か。それは基本的には朱子學であるが、しかしそれは矯激とさえいわれた宋代朱子學ではない。明、清を通じて科擧の中心にされ、專制支配のイデオログとされた朱子學、宋代朱子學が君臣父子上下關係的秩序イデオログとして機能したそれが、明、清を通じて適用された體制教學としての朱子學である^⑩。

この溝口氏の見解から上記した楊福泉氏の主張を理解出来るのである。この楊氏の學說に關しては、別稿で詳しく考察する豫定であるので、本稿においては概略的に紹介すると、まず前記した楊氏の見解のうち①にあたる青年男女の情死については、確かに新中國成立以前の麗江納西族の社會では他民族に比して、その事例が壓倒的に多かったことは事實である。そして楊福泉氏の見解の如く、清代雍正元年（一七二三）の改土歸流以後、その件數が増えたのも事實であろう。その原因は改土歸流によって、家父長の權限が強化され、結婚は親同士で決められることがさらに強まったため

である。という。これは前記した溝口氏の儒教の側面の①禮制、②倫理に關連するものであろう。②の葬儀の問題は③習俗に、③の男尊女卑の問題は④、⑤に關連するものとして考えられる。そして楊福泉氏の主張する納西族社會の古來の傳統を崩壊させたものは、前記の溝口氏の考察された打倒されるべき禮教と關係してくると考えられないであろうか。このように考える納西族という一少數民族の事例からも改土歸流、流官の役割、儒教という大きな問題を漢族と少数民族の兩面から考察することが出来ると思われる。

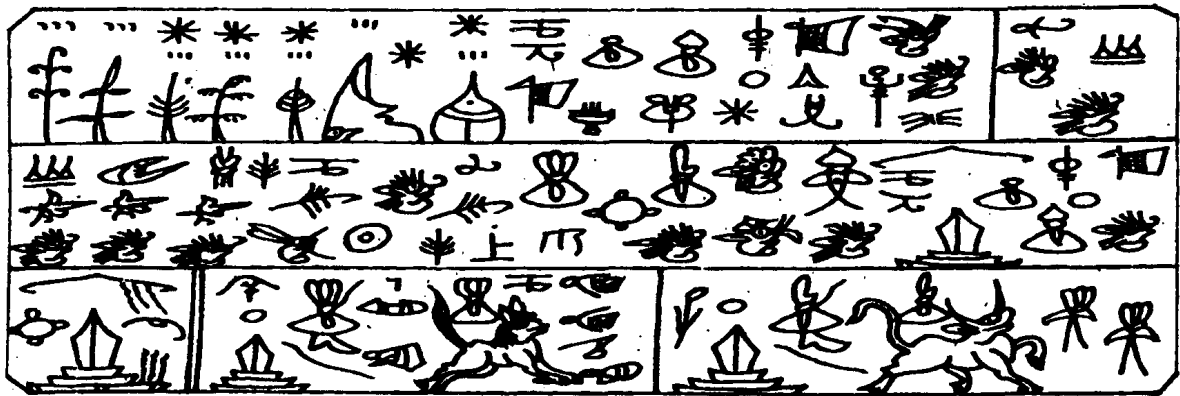
なお本稿で紹介した「納西人と楊氏家族」の著者趙銀棠氏（一九〇四—一九九三）について一言すると、彼女は前記した如く、納西族出身の女流作家である。麗江で生まれてその生家は貧しい儒者の家庭であった。一九二〇年彼女は十六歳の時、長江第一彎の農村の小學校で教師となり、この時から彼女の教師生活が始まる。一九三六年から三八年にかけて、彼女は麗江の中學の教員となる。一九四二年彼女は故郷を離れて、重慶に行き、郭沫若を訪ねる。そして郭沫若の指導を受ける。麗江に歸ってから中學の教員となるが、世俗の偏見を打ち破り、苦勞して金沙江、瀾滄江兩岸の邊境地區の調査を行い、大量の生きた民間文學を採集した。そして納西族の古代神話、民歌を研究し、さらに地方志等の歴史史料を分析し、納西族の歴史、文化の起源を探究した。一九四七年には『玉龍舊話』を完成させ、一九四九年友人の援助を得て出版する。

そして新中國成立後、彼女はさらに七十五歳の高齡で歴代の文人及びその作品、東巴經典の解説、新中國成立後に發表された詩文も加えて『玉龍舊話新編』を發表する。本稿で紹介した作品はこの論文集に掲載されたものである。¹¹

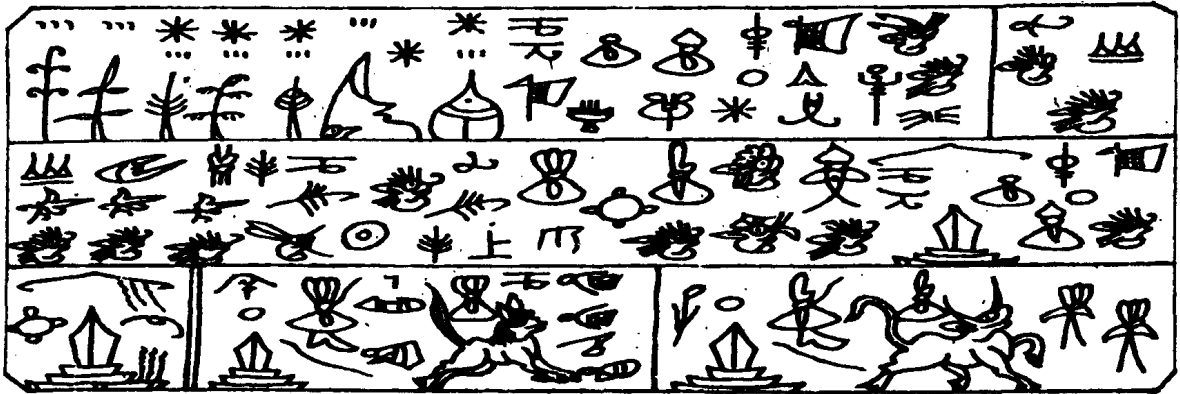
（ ）は村井注

注

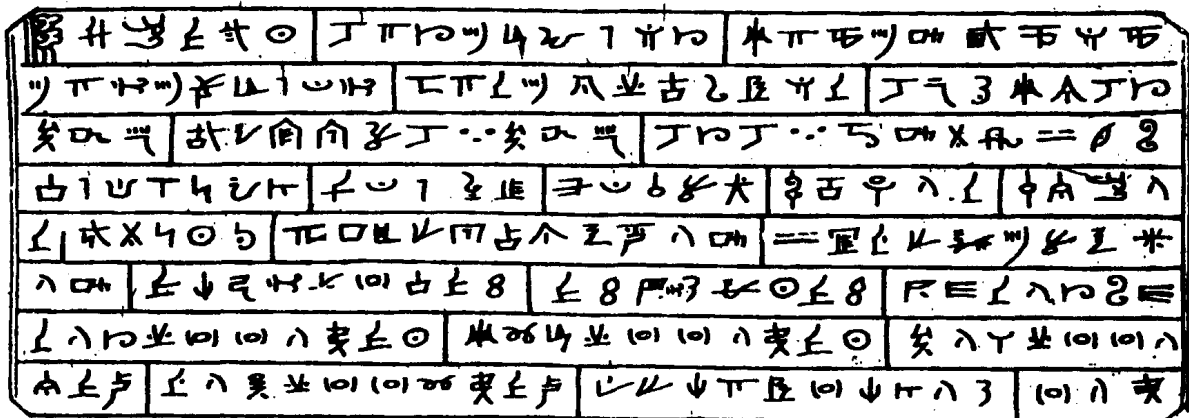
- (1) 馬寅主編、君島久子監譯『概説』中國の少数民族』三省堂 一九八七年、二九〇—二九一、二九四—二九五頁
- (2) なお納西族の改土歸流の状況と流官楊氏に關しては、J. F. Rock氏が詳細に報告している。J. F. Rock 1947 *The Ancient Na-khi Kingdom of South-West China*, Monograph Serie VII and VIII (2•vol) Harvard-Yenching Institute, Harvard Press, pp. 147-149
- (3) 李近春、王承權『納西族』民族出版社、一九八四年、一一九頁、六五—七五頁、國家民族事務委員會經濟司、國家統計局 國家經濟總合統計司編『中國民族統計年鑑』民族出版社 一九九六年、二一一頁。なお本稿においては、その居住地の中心である麗江納西族自治縣一帶に居住する納西族に問題點をしばり論述を行った。つまり納西族はその居住地では風俗、習慣、社會文化面で著しい差異が見いだされ、土司もその居住地で異なっていた。麗江の土司木氏は最大の土司であった。しかし、すべての納西族土司が木氏のように廢止されたわけではない。特に寧蒗彝族自治縣の永寧に居住する集團は摩梭人と稱され、その土司阿氏は麗江納西族の土司木氏のように改土歸流されることなく、新中國成立後の民主改革まで存続している。詹承緒、王承權、李近春、劉龍初『永寧納西族的阿注婚姻和母系家庭』上海人民出版社、一九八〇年參照
- (4) 郭大烈、和志武『納西族史』四川民族出版社 一九九四年、三六四—三六五頁
- (5) 郭大烈、和志武『同上』三六五—三六七頁
- (6) 李世愉『清代土司制度論考』中國社會科學出版社 一九九八年、四一—七九頁
- (7) 菊地秀明『廣西移民社會と太平天國』風響社 一九九八年、一四五—一四六頁
- (8) 郭大烈、和志武『納西族史』三六八—三七二頁
- (9) 楊福泉『改土歸流』中的『以夏變夷』對納西族社會的影響』王筑生主編『人類學與西南民族』雲南大學出版社 一九九八年、六二四—六四三頁
- (10) 溝口雄三『中國前近代思想の屈折と展開』東京大學出版會、一九八〇年、四三—四五頁、溝口雄三、中嶋嶺雄編著『儒教ルネッサンスを考える』大修館書店 一九九一年、一六一—一八頁
- (11) 趙銀棠『玉龍舊話新編』雲南人民出版社 一一四頁、麗江納西族自治縣志編纂委員會編纂『麗江納西族自治縣志』雲南人民出版社、二〇〇一年、九五—九五頁



象形文字で記された東巴經典



(同)



音標文字で記された東巴經典

李霖燦『麼些族的經典研究』東方文化書局 1971年